

7月から8月にかけて韓国の日本派遣団が日本を訪れている時に、島根県のプロダクションに私も参加して今年の派遣団（ヘラン）と交流した。そのため、つどいでヘランの団員と再会できることをとても楽しみにしていた。私の派遣の目標のひとつとして「韓国人の友達をたくさんつくる」ということを挙げていたので、同世代の人が集まるつどいで、たくさんの人と話そうと思っていた。

私たちの班は留学をテーマにディスカッションをした。準備するにあたって、留学生数の減少や留学生が帰国した後の課題が分かり、日本の留学状況を知ることができた。韓国の留学状況について聞いてみると、興味深い点がいくつかあった。韓国の奨学金は給付型で金額も多くもらえるためたくさんの人が留学するという点だ。私は韓国への留学を考えているが、日本では留学したくても、なかなか奨学金がもらえなかったり、貸与型の奨学金も多いので、韓国の奨学金制度が羨ましいと思った。日本もそのような奨学金制度ができれば、もっと留学生が増えるだろう。また、韓国では就職が厳しい状況にあるので、語学に興味がなくても就職するために語学を学ぶ人もいそう。このことも大学生の留学生数の増加につながっているのだと言っていた。日本とは留学に対する考え方が違うなと感じた点であった。

文化交流会ではお互いの国のダンスや歌を披露があった。ダンスの時には、韓国青年が掛け声をかけてくれたり、手拍子をしてくれて盛り上がった。最後の出し物では「輪になって踊ろう」を両国の青年が手をつなぎ、大きい輪になって歌った。みんな楽しそうに笑顔で歌っていて、会場全体がひとつになるのを感じた。とても幸せな時間だった。夜食交流会ではヘランの中でも、今まで話したことがない人と話すことができ、友達の輪を広げることができた。島根で一緒に過ごした時間は短かったが、ヘランの団員が私のことを覚えていてくれたのがとても嬉しかった。2泊3日の様々なプログラムを通して、



共同体活動で作った作品と班のみんな

韓国人の友達も増え、さらに交流を深めることができても嬉しく思う。別れは涙が出るほど名残惜しかった。より一層韓国語の勉強に励み、韓国語でもわかりやすく会話できるようになりたいと強く思った。これからも連絡を取り合い、交流を続けていきたい。

そして三つ目は韓国外国語大学の李教授の講義である。教授は日韓関係についてお話しくださった。最近では、観光客や貿易規模の減少だけでなく韓国における日本語学習者も減っているということを聞いた時には悲しい気持ちになった。テレビの報道ではお互いに反日感情や嫌韓感情を露わにしているため、報道で得た情報だけでその国を判断し悪いイメージで捉えがちである。実際私の家族も韓国に対してあまり良いイメージを持っておらず、メディアの報道だけで韓国を嫌いになってほしくなかったので「私にできることは何か」をずっと考えていた。李教授は日韓関係の解決策として「一人の人間としてできることから始める」、「勉強し、行動する」とおっしゃった。私はこの言葉を聞いたとき「これだ!」と思った。続けて、「相手の国の一部の人の言動をその国の全ての人もそうだと思うないでほしい」と述べられた。本当にその通りだと深く納得した。今回の派遣での私のもう一つの目標は「韓国の良いところをたくさん見つける」ことであった。家族をはじめ、韓国に対して偏見を持っていたり、良いイメージを持っていない人に韓国の良さを少しでも伝えたいと考えていたからである。李教授の講義で腑に落ちたことがたくさんあり、これから私が何をしていけばいいのか糸口を見つけることができた気がする。まずは家族にこの派遣で学んだ韓国の文化や歴史、そして韓国人の優しさ温かさなど派遣中に感じたことや体験したことを話し韓国の魅力を伝えていきたい。少しでも多くの人が韓国に興味を持ち、好きになってくれるように努力していく所存である。李教授がおっしゃったことは日韓だけでなく他国との間でも言えることであるから、事後活動でいろいろな国の人と交流するときは先入観を持たず、たくさん会話し、その国について知りたいと思う。貴重なお話を聞くことができてとても有意義な時間であった。

本事業ではホームステイ、施設見学、高校生や大学生との交流、文化体験など本当に様々なことを経験し学んだ。この陰には多くの人の支えがあり、そして国の代表として派遣されたことを忘れてはならない。派遣中はスケジュールをこなすことで精一杯であったが、帰国してからこんなに貴重な経験をさせていただけて幸せだと思った。感謝の気持ちで胸がいっぱいだ。特に毎日私たち派遣団のサポートをくださったコーディネーターのジウンさんと通訳の二方には本当に感謝している。一日のスケジュールの時間管理や食事の配慮、通訳の他にも私たちが知らないところで大変な思いをしてくださ

うと思うが、私たちが不安もなく安全に充実した日々を過ごせたのは3人の方のおかげである。いつも3人の方を見ていて、このような仕事は日本と韓国を結ぶ素敵な仕事だと思った。同時に日韓の架け橋になる、そして国際的に働きたいという気持ちを再確認することができた。

最後に、本事業を支えてくださった内閣府、青少年国際交流推進センターの皆様、韓国青少年活動振興院の皆様、そして韓国で出逢ったすべての人に感謝申し上げます。ありがとうございます。韓国派遣団のみんなと共に過ごした15日間は一生の宝物である。

感謝の気持ちを忘れず、15日間の経験、出逢いを胸に刻み日韓のよりよい未来のために貢献していきたい。

1. ディスカッションの概要

日 時	9月23日 9:00～15:30
場 所	OLYMPIC PARKTEL (ソウル)
プログラム名	日韓青少年交流会
テーマ	【多文化共生】 <教育> 海外留学による多文化共生社会への可能性 ～各国の留学生を増やすには～ <社会のあり方> 多文化共生社会の実現に近づけるための社会のあり方 ～国、地方全体で多文化共生社会を進めるには～ <社会> 難民問題に対して私たちができること ～日韓（各国）の難民への取り組み、改善点～ <マスメディア・世代間の意識の違い> 海外ニュースの取り上げ方に対する感じ方 <仕事観> 様々な仕事観を持つ人は共生できるのか
参加者	日本青年25名、韓国青年36名
スケジュール	9:00 - 9:20 ディスカッション オリエンテーション 9:20 - 12:00 ディスカッション 第1部 12:00 - 13:00 昼食 13:00 - 14:50 ディスカッション 第2部 15:10 - 15:40 ディスカッション 成果発表



2. 分科会の概要

テーマ	多文化共生
参加者	日本青年5名、韓国青年7名
トピック	<教育> 海外留学による多文化共生社会への可能性 ～両国の留学生数を増やすには～
成 果	両国の留学状況を知ることができた。これから両国が留学生を増やすための政策案を考え共有することができた。

1. 韓国の現状

- ・最近の韓国での人気の留学先は、1位：英語圏、2位：中国、3位：日本である
- ・韓国では近年、語学を就職活動に使うために大学時代に留学する人が増加している
- ・3大スペック（学歴・成績・英語力）を備えることで就職時に有利になる
- ・大学での奨学金制度が整っている
- ・大学の支援が充実している
- ・高校生の留学者数が低迷している。韓国では大学進学が重要視されている。最近では、高校生の学業に対するストレスが問題視されており、自由学期を設けている学校が多い。その時期に海外に留学する生徒もいる（自由学期とは、やりたいことを自由にできる期間のことを指す）

2. 日本の現状

- ・最近の日本での人気の留学先は、1位：アメリカ、2位：カナダ、3位：オーストラリア、4位：中国である
- ・日本は2004年から学生の留学者数が減ってきている
- ・日本では他国と違い、大学4年間で卒業するという風潮があるため、休学などの措置をとって留学をする人は少ない
- ・奨学金制度が整っていない。そのため、金銭面が理由で留学を諦める学生も少なくない
- ・大学の支援が少ない
- ・近年では、政府や企業が学生を留学に促す政策などを打ち出している

3. 上記現状をふまえた上での意見交換の内容

- ・留学経験者が留学経験や留学の意義などを周りに共有することが必要である
- ・学校や地域で報告会を開催し、今回の派遣事業の経験を伝えていきたい
- ・SNSにプログラムなどの魅力を載せネット配信を積極的にすることが大切である

4. 結論

- ・これからはグローバル化や多文化共生社会が進み、海外からの労働者の増加や海外で勤務する機会増の可能性が高まってくるために留学は必須である
- ・グローバル社会では、言語力・異文化理解能力や環境適応能力などの国際的感覚を身につける必要があるため、海外留学の機会は重要である
- ・若い世代が国際的感覚を身につけるために留学の環境作りが大切である

教育グループ感想

私たちのグループは留学による多文化共生の可能性について議論した。ディスカッションに入る前に、参加者は留学について実際にどう考えているのかを確認し合ったが、ここで日韓青年が留学に対する各自の意識を共有できたことは非常に有意義であったと感じる。参加者の多くは日本あるいは韓国への留学に関心を持っており、語学力の向上や就職活動に役立つ技能の取得など、留学の目的が明確であった。一方で、堅い勉強に限らず、自分の人生の幅を広げてより楽しく生きるために留学したいという意見もあり、留学を通じて多文化との共生を楽しむという選択肢もあるのだと考えさせられた。

ディスカッションでは、日韓両国における学生の留学に関する現状と課題を確認し、その解決策及び私たち自身にできることについて話し合った。日本については大学生の留学人数が減少傾向にあることが課題とされ、その要因として就職活動への影響の心配や経済的な問題、大学の支援制度の整備不足などが挙げられた。一方で韓国については、大学生の留学に対する支援（奨学金・単位互換制度など）が整備されており、日本よりも大学生の留学が盛んであるが、高校生の留学人数は非常に少ないことが課題とされた。要因としては、韓国における大

学入試の重要性とそれによる高校生の自由や時間の不足が挙げられた。解決策としては、両国の課題に見合った制度の整備をすること、また私たち学生自身が、留学経験者と留学希望者とのネットワークを構築し、拡散していくことが挙げられた。

両国は異なる課題を抱えているように見えるが、今回の議論を基に、私は両者に共通する課題として学生自身の意識改革が必要だと考えた。日本の場合は、大学生が留学して異文化を理解したり新たな知見を得るよりも、目の前の就職活動や単位取得などを重視してしまうことに問題があると感じる。韓国の場合は、高校生が大学入試で人生が決まってしまうと認識していることに問題があると感じる。留学を盛んにするには、制度や経済的な問題以前に、学生がもっと広い視野を持ち、留学や異文化交流に積極的になれるような社会の構築が必要だと考えられる。

このような考えに至ったのは、ディスカッションで多くの人の意見を聞くことができたためである。グローバル化が進む現代において、今回のように多様な考えを持つ人と意見を交わすことが、異文化理解、そして多文化共生の第一歩となるのではないかな。



テーマ	多文化共生
参加者	日本青年5名、韓国青年8名
トピック	＜社会のあり方＞ 多文化共生社会の実現に近づけるための社会のあり方 ～国、地方全体で多文化共生社会を進めるには～
成果	多文化共生のために国や地方自治体で行っている取組みについて知ることができ、私たち一人一人が多文化共生のためにできることは何かについても考えることができた。

1. 韓国の現状

- ・女性家族部の政策を各市や区が受けて各地で多文化共生・多文化家族への支援が行われている【始興市、大田市、釜山市、春川市】
→韓国語が話せない外国人への韓国語講座、韓国社会に慣れるためのプログラム、通訳サービス、多文化夫婦・子供への相談サービス、他国の文化を紹介するイベント（韓国にはたくさんの外国人が住んでいることをアピールする）
- ・財団などが取り仕切る日韓青年交流会や、個人で自発的に企画する交流会等もある
- ・現在、韓国では女性の社会進出の増加に伴い結婚をしない女性が増えてきていることに伴い、結婚できない男性も増えており、結婚紹介サービスを利用して東南アジアの女性と結婚するケースも多い
- ・韓国人がしがたがらないようなつらい労働に外国人が採用されている
- ・多文化家族（家庭）を取り上げたテレビプログラムが増えている

2. 日本の現状

- ・都市部の駅などでは日本語、英語、中国語、韓国語の案内が多く見られるが、中心部を離れるにつれて外国語表記が見られなくなる
- ・日本での生活に必要な各種登録や、災害時の対応、日本の習慣などに対して困っている外国人が多い
- ・在日朝鮮人が多い地域においても未だにヘイトスピーチなど差別的な行動が多々見られることから、引け目を感じて自分のルーツが朝鮮にあることを隠して生活している人も多い
- ・就労ビザ問題、偽装結婚がある
- ・総務省から出ている「多文化共生推進プラン」を元に県や市など地域ごとで取組みが行われている【青森県、千葉県、山口県、鹿児島県、宮城県仙台市】
→災害時の外国人への対応（ハザードマップ・掲示板・防災無線などの多言語化、防災訓練への外国人の参加）、学校での給食やALTとの交流を通して多文化について触れる機会、外国人向けに日本の習慣を知るための講座、日本語講座

3. 上記現状をふまえた上での意見交換の内容

- ・両国とも多文化共生に対する国の政策を元に、地方自治体で様々なサポートや取組みが行われているが、サポートを必要としている外国人に情報が届いていないことが問題である。情報発信の場、情報を必要としている外国人が確実に情報を得られる環境の整備が必要である
- ・交流会やスタディなどは多々行われているが、興味のある人同士が参加することが多く、興味の無い人でも気軽に参加できるようにすることで多くの人が他の国のことを知るきっかけになるのではないかな
- ・国内の就職難により苦しい生活を余儀なくされる人もいる中で、大量に流入する外国人を優遇したら逆差別になるのではないかな。流入した外国人による犯罪も増えてきている中、多文化共生が必要だろうか
- ・多文化共生をしなくてはならないのではなく、実際にはせざるを得ない状況であるがゆえに相手のことを知り、自分たちの違いを理解しながら生活していくことが大切なのではないかな
- ・多文化共生社会を進めていくためには、個人が持っている外国へのマイナスな認識を変えていくことが必要であり、認識に影響を与えるのはメディアの力が特に大きい

4. まとめ

- ・両国自治体姉妹都市連携の活性化、交流を活発に続けることにより、まずは国の地方同士が繋がることによって国同士の繋がりもでき、他国を知ろうというきっかけになる
- ・両国で共通する課題や問題に取り組むなど、分野別交流プログラムの多様化を進めることによって、他の国の事を知ることになる

- ・未来を担う子供たちへの多文化教育の場や、高齢者の認識改善のためのプログラムなど世代に合わせた多文化教育が必要だ
- ・国や自治体で行われている多文化共生のためのプログラムやサポートなどの多文化支援政策を必要とする外国人に発信し、確実に伝えられる方法や機会が必要だ
- ・相手と自分との違う点を批判し、受け入れないのではなく、まずは相手のことを知ろうとすることから始め、受け入れていくことが多文化共生につながる

社会のあり方グループ感想

私たちは「多文化共生社会の実現に近づくための社会のあり方～国・地方全体で多文化共生社会を進めるには～」というテーマのもと討論をした。ディスカッションメンバーがそれぞれ地方出身者ということもあり、都市部だけでなく、地方でも様々な取り組みをすることで、多文化共生社会への意識が広がると考え、地方にポイントを置いたテーマ設定にした。自主研修時にはインターネットで記事や論文をさがしたり文献を読んだり、外国人留学生への聞き込みや県に直接お話を伺ったりと様々な手段で情報集めを行った。地元が青森、千葉、山口、福岡、鹿児島と日本の中でもそれぞれの地域の特色の意見交換、比較することができてよかった。

当日のディスカッションでは両国の多文化共生の地域の現状はもちろん、認識についても話し合った。国や地域の政策より直接私たちに影響を与えるのはメディアであり、その消費者である私たちがどのように認識し、メディアが誇張したり、情報を再生産したりしているのが問題だという意見も出た。両国の共通課題であると感じた。



また、印象的だったのは、「国内の就職難により苦しい生活を余儀なくされる人もいる中で大量に流入する外国人を優遇したら逆差別になるのではないか。難民が絡んだテロ、新しい犯罪を無視できなくなっている現在、多文化共生は必要であるのか。」という内容まで話が及んだことだ。表面上の意見交換ではなく、私たちがこのテーマについて深く考えることができているからこそ出てくる影の部分。多文化共生を進めるには影の部分にも目を向け、それをどう対処改善するか考えなくては、新しい社会はつくっていけない。そのことを再認識することができた。

私たちは相手との違いを理解して受け入れ、新しい一つの社会をつくっていかねばならない。ビビンバも万華鏡も混ざれば混ざれるほどおいしく、美しくなる。それと同じようお互いが理解し合い共存できるようになる世の中を私たちがつくっていききたい。それぞれの場所で自分に何ができるか考え、多文化共生に少しでも力になっていきたいと誓い合った。



テーマ	多文化共生
参加者	日本青年5名、韓国青年7名
トピック	＜社会＞ 難民問題に対して私たちができること ～日韓（各国）の難民への取り組み、改善点～
成果	両国の難民受入れの現状を知ることができた。これから難民を受け入れるためにしなくてはいけないことを考えることができた。

1. 韓国の現状

- ・韓国の難民受入数：98人（2016年）全体の約2%
- ・韓国の難民受入総数：594人（1994年～2016年）
- ・難民を受け入れるための受入体制には6段階ある。1～5は韓国へ来る前の段階。6段階目は韓国へ来てから、韓国に馴染むための初期定着支援、住居支援、生活支援（就労支援）等の支援
- ・脱北者は、言語が同じでも方言など細かい違いが見られる。そのため気づかれるといじめにあうことが多い
- ・脱北者は大学入試、留学等で優遇される。また、住居の斡旋もある
- ・脱北者は、中国、ロシア等を回って韓国へ来る
- ・脱北者の多くは、1～2人である。家族全員で来ることはあまりない
- ・韓国が住みづらい人は、アメリカへ行くこともある
- ・1998年に脱北者の保護を行うNGO団体ができた。そのNGOの会長は日本人である

2. 日本の現状

- ・日本の難民受入数：28人（2016年）全体の約0.4%
- ・日本の難民受入総数：約690人（1981年～2016年）
- ・日本人の6割が難民の受入れに消極的な意見を持っている
- ・難民を受け入れた後の教育、言語、就職を支援する制度が充実している

3. 上記現状をふまえた上での意見交換の内容

＜難民に対して手厚い保護をするべきか＞

- ・国民を第一に考えるべきでは
- ・生活の質の違いがある。難民だからといって保護する程度を低くすることは間違いないのでは
- ・同等でありたい。どっちを優先したいかではない。また、自国民を優先される場合、どこまで基準とするべきなのか、基準が作れるのか曖昧で難しい

＜難民を受け入れたいか＞

- ・受け入れる側の意識を変える必要がある。難民について学ぶ機会を増やすことで意識が変わるのではないかと
- ・このディスカッションに入るまで難民についてあまり考えたことがなかった
- ・受け入れるにはそのための準備が必要
- ・難民について否定的だったが、調べるにつれて受け入れるべきだと思うようになった
- ・テロが難民に紛れ込んでいる可能性がある
- ・難民がテロリストというのは間違っている。難民は難民であってテロリストはテロリスト。ごくわずか紛れている可能性のあるテロリストのために難民を受け入れないことは間違っているのでは
- ・同じ世界市民として受け入れるべきだ。可哀そうと思って受け入れるだけではなく、受け入れることに責任を持つ必要がある

＜難民をもっと受け入れるにはどうするべきか＞

- ・難民について調べることで、難民を受け入れようと思った
- ・もっと調べる、知る機会が必要なのではないか
- ・日本人は外国人に対して閉鎖的。テロと関連させて受け入れないという姿勢は良くない
- ・難民を収容する人数といった基準をもっと明確にする必要がある
- ・食など文化の違いにはどう対応するべきか
- ・合わせる必要はない。必要があれば、コリアタウンや、中華街といった場所へ行けばよいのではないかと